

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 23 日現在

機関番号：32681

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520132

研究課題名(和文) 近世前半の宮廷サロンにおける絵画制作と和歌の役割 屏風絵と寄合画帖を中心に

研究課題名(英文) The Interaction between Paintings and Waka Poems in the Imperial Court of the Early Edo Period: Focusing on Albums and Screen Paintings

研究代表者

玉蟲 敏子 (TAMAMUSHI, SATOKO)

武蔵野美術大学・造形学部・教授

研究者番号：10339541

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円、(間接経費) 960,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果として特筆されるのは、17世紀の宮廷で制作された和歌を伴う画帖・屏風絵が、絵画ばかりでなく書の料紙の装飾や縁裂の装飾なども重視して制作されていた事実を明らかにしたことである。伊達家伝来の狩野探幽・安信等合筆「百人一首画帖」には明清風の木版摺料紙や伝統的な金銀箔散し・墨流の技法が複合的に用いられ、その表現は仁清の色絵陶器にも共通している。山本素軒筆「明正院七十賀月次図屏風」の表装は七十賀の記録と一致しており、当時のまま伝承されていることが判明した。ともに17世紀後半の京都の装飾感覚を示し、その成立事情から宮廷文化に対する武家方の憧憬や、緊張した当時の朝廷と幕府の関係などがうかがえる。

研究成果の概要(英文)：In notable results of this research we proved that not only the paintings and calligraphy but also the decorative qualities, such as ornamented papers of Waka poem albums or mountings of screens, were evaluated among the imperial court of the 17th century. In the Hyakunin Isshu Albums by Kano Tanyu and et-al, formerly owned by the feudal lord Date family, the imported papers with wood-block decoration of Ming-Qing style were used adding the Japanese style ornamentations. Their decorative sense is similar to that of the enamel paintings of the Ninsei Ware of the mid-17th century. In the Screens of the Twelve Months Celebrating the 70th Birth-day of the Empress Meishoin by Yamamoto Soken, their decorative qualities are coincident with the document which recorded that celebration in 1692. Through both examples, we could know the yearning for the imperial culture of the upper warriors, and the tense relationship between the imperial court and the Tokugawa Shogunate of the 17th century.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：美学・美術史

キーワード：書画藝術 和歌の政治性 朝幕関係 共同制作 宮廷美術 装飾性 仁清陶

## 1. 研究開始当初の背景

日本では、9世紀末頃から天皇、公家ら宮廷人、宮廷絵師らの共同作業によって和歌を伴う絵画作品が盛んに制作・鑑賞されるようになったが、本研究ではとくに17世紀前半の宮廷で制作された画帖や屏風絵に注目し、その集団的な制作——それを本研究では〈サロンの絵事〉として捉える——の美術史的な意義を考えるものである。

従来の研究では、平安時代の屏風絵の形式は、14世紀半ばに衰退したと言われてきたが、集団的制作という形態は衰えず、文献上、15世紀半ばに能登守護の畠山義忠邸において詩歌を伴う「月次花木図障子」が制作されたことが分かり、宮廷人が和歌や本文の筆者として関わった冊子形式の「源氏絵」も、ハーヴァード大学美術館本のように継続して制作されている。

17世紀を迎えると、後水尾院、靈元院などを中心とする宮廷サロンにおいて和歌に基づく絵画制作は目覚ましい復活を遂げ、しかも、色紙形を置く屏風だけでなく、中世以降に現れた色紙や扇を貼付する屏風、賛文を伴う掛幅や打ち付け書きの書画屏風、さらに棚道具の冊子(画帖)といった形式も新しく加わったところに特徴がある。

1960年代に、田能村忠雄によって「明正院七十賀屏風」(奈良・円照寺蔵)の研究が発表されてから半世紀近くが経過し、現在では近世前半の宮廷社会で制作された賀の屏風絵、歌仙画帖類の個別研究は、相当な数が蓄積されるにいたっている。また19世紀初めの江戸でも、御三卿・幕閣と江戸狩野家絵師らの共同制作によってこの種の月次図が制作されており、武家方における宮廷文化への憧憬が絶えなかったことが確認できる。

以上が美術史の側からの開始前後の状況だが、和歌文学研究においても、新しい角度からの屏風歌研究が進展を遂げており、とくに屏風に書かれた和歌の視覚化の問題を扱

う内田順子「絵と歌と書と」『国語国文』71-10など、集団的な制作と鑑賞の視覚化の問題を考察しようとする本研究と、問題意識を共有する論考も現れ、美術史の側もその成果を取り込み、新たな議論を起こしていく必要性が生じてきている。加えて近年、鈴木健一氏による近世前半の堂上方歌壇の研究、また五十嵐公一氏の一連の業績や田島達也氏、野口剛氏による近世前～中期の京都画壇の研究など、文事、絵事とも基礎研究が目覚ましく進展したことも本研究の遂行を力強く後押しするものである。

これらの状況を伺うとき、従来の知見の上に最新の成果を加えて総合・整理し、新たな枠組みの研究の登場を俟つ機運が高まってきているといえる。本研究はそうした時宜を機敏に捉え、この分野の研究推進のために企図された。

## 2. 研究の目的

本研究が対象とする17世紀の和歌を伴う障屏画や寄合画帖や文献資料は豊富に遺されている。それらは、和歌・書・絵画を担当する複数の制作者が関与する集団性を特徴とする。集団性は、同一の画面や作品内に絵・書・歌が共存する視覚的な形式で表されているが、近世前半にこれらの作例が数多く制作された背景には、緊張を孕んだ朝廷と幕府の関係がある。幕府のコントロール下に置かれた宮廷方において和歌の伝統に対する自覚意識が高まり、いっぽうの武家方においては経済力をもって憧憬する宮廷文化を取り込もうとする意欲が高まった。宮廷方はチームを作って和歌を伴う書画帖や屏風の制作し、注文先の武家方の期待にかなう古典趣味をもつ範例的な作品を供給したのである。

以上により、拠点となる重要な作品研究をとおして、日本において数百年に亘り、数度の復興の機会を得て、このような絵画、文学、さらに工藝的な装飾技法も加わった複合的

な視覚藝術が再生し続けた要因の一端を明らかにしていきたいと考える。これらは近代主義的な美術観では捉えきれないジャンル観や価値観をもっており、今後、新たな日本美術史を構築していくための視座を獲得することを大きな目標に掲げる。

### 3. 研究の方法

今回のプロジェクトの研究期間は三年間という短期間であるので、調査対象を画面形式と和歌テキストによって分類し、年度毎に効率的に調査を進めることにした。研究体制は、研究代表者一名、研究協力者三名（五十嵐公一、野口剛、三戸信恵）で構成し、元米国・メトロポリタン美術館研究員渡辺雅子氏にも協力を仰いだ。

まず第一年の平成23年度に、(1)～(4)からなる三年間の研究の全体像を想定し、年度毎この項目に従って、多角的に研究・調査に着手することにした。

(1) 先行研究の整理と調査リストの作成  
『江戸名作画帖全集』IV狩野派、V土佐・住吉派（駿々堂、玉蟲はVIII巻に編者として参加）、『古筆手鑑と画帖の名品』（サントリー美術館、三戸が担当）、『近世京都の狩野派展』（京都文化博物館、野口が担当）、『近世京都画壇のネットワーク』（吉川弘文館、五十嵐の著書）、*Word in Flower* 展図録（イェール大学美術館）を参照し、出発点となる対象作品のリストの作成をした。

#### (2) 重要作品の調査

以上のリストに基づいて、第一年次から平成25年度の第三年次まで、国内および海外調査も視野に入れて研究の要となる画帖、屏風絵の撮影・調査を行った。調査予定の品目のうち、研究期間内に展覧会で公開されているものはその機会を利用し、所蔵者を煩わさないように配慮した。調査品目は「4. 研究成果」の項目に記す。

#### (3) 調査完了作品の整理

撮影調査した作品は、研究代表者の所属する武蔵野美術大学の大学院生・教務補助などを動員して、画像の整理・プリントアウトなどを行い、次回の調査に備えるようにした。

#### (4) 関連研究の収集と検討

研究期間内に出版・公表された関連研究野圖書・雑誌論文などを集め、適宜、有益な情報を加えて研究を進展させた。

### 4. 研究成果

上記の方法によって調査を行った結果、様々な新知見を売ることができた。ここに箇条書に記す。

#### (1) 画帖の研究成果と新知見

調査した画帖は、以下である。

①住吉具慶・狩野秀信筆「時代不同歌合」（上下二帖、静嘉堂文庫美術館）

②狩野探幽筆「百人一首画帖」（上下二帖、個人）

③狩野探幽等筆「新三十六歌仙画帖」（二帖、東京国立博物館）

④住吉具慶筆「徒然草画帖」（一帖、東京国立博物館）

①～③はいずれもアルバム形式に 25 図（書・絵）×2、〈50（書）+50 図（絵）〉×2、〈18（書）+18 図（絵）〉×2 ずつ収録された図数量の極めて多い作品で、それぞれの分析に時間をかけた。その結果、従来、一部の歌仙図を除いて全体像が紹介される機会のなかった②について多くの新知見を得ることができたのでここにまとめておく。

歌仙絵は、狩野探幽・益信・安信・常信および無署名が各 20 図を制作し、上帖の巻頭を探幽、末尾を安信、下帖の巻頭を常信、末尾を探幽が担当する。よって、全体を探幽が統括し、要所を中橋・木挽町両家の当主が固め、探幽の元養子で別家、駿河台家の当主の益信が協力する体制であることが確認される。無署名の図が同様に 20 図含まれているのが謎だが、探幽の嗣子が匿名で参加した可

能性もあり、その検討は今後の課題としたい。

本作は「百人一首」をテキストにした画帖の比較的早期の例として位置づけられているが、和歌を施した料紙の装飾には、従来、類例が報告されることがないほどの独特さが認められる。伝統的な金銀の泥箔を用いるだけでなく、色面で分割したり、木目のように繊細な墨流や唐草・葡萄栗鼠文・亀甲文など型模様を全体に施した例がある。藍の打曇に金泥梅文の帯模様を施した一葉もある。さらに、中国・明清風の唐子図・山水図・牡丹図・山水帆掛舟図などを摺ったものもあり、検討が必要だが、蠟箋だとするならば、当時、黄檗僧などを通じて京畿に流入してきた明末の木版摺の詩箋などとも重なる中国趣味の一端を垣間見せていることになる。

加えて、それらの技術は複合的に使用され、雲文の摺絵に金銀泥の雲文を重ね描きし、あるいは墨流しに波文や、菊に流水文、紅葉に流水文などの型模様を加えたものもある。これらの例は、この時期の和歌色紙の装飾が、けっして守旧的ではなく、新渡品を積極的に取り込もうとする意欲的なものであったことを示している。

本画帖の制作年は先行研究により、狩野探幽が法印に任ぜられた寛文2年(1662)から執筆者の烏丸資慶の没した同9年(1669)までに押さえられているが、同時期の他分野の装飾法と比較すると、仁清陶の装飾様式との関連が大いに認められる。たとえば、波の型模様は、瀟洒な「色絵波三日月文茶碗」(東京国立博物館)の波濤とほぼ同型の図様であり、青金・赤金等でまろやかに二、三の山頂を描き、ときに花卉文の型模様を前後に挟む装飾法は、やはり「色絵吉野山図茶壺」(福岡市美術館)などの山波の表現と共通する感覚である。仁清が色絵陶器を制作するようになるのは万治以降と指摘されており、まさに両者の装飾感覚の共通性は、ともに同時代のごく近い環境で制作されていることをうか

がわせるのである。

本画帖は仙台伊達家伝来であることが付属箱の貼紙に捺された「観瀾閣蔵品印」より確認されるが、仁清の茶壺も多くが丸亀藩主京極家の注文で制作されたものである。仁清陶の下絵には丸亀藩御用絵師で狩野益信の弟子の田中益親が関与していた可能性が指摘されているが、本画帖の歌仙図制作にも益信をはじめとする江戸狩野家が参加していることを想起するとき、それもまた両者の間に認められる共通性の背景を解くカギとなるに違いない。武家方の注文に応じて京都の宮廷と狩野家絵師・職人集団が一体となって文化戦略に励む様子が浮かび上がってくるのではなかろうか。

## (2) 屏風調査の成果

本研究のもっとも重要な課題は、基準作である「明正院七十賀月次図屏風」(奈良・円照寺)の精密な調査および撮影であったが、これを遂行できたことがまずは大きな成果と言える。ご所蔵者や関係各位に御礼申し上げたい。以下箇条書に知見を記す。

### ①色紙形、表具裂、金具等の重要性

田能村忠雄らの先行研究ではとくに重視されてこなかったが、本屏風は絵画だけでなく、上部に貼られた絹地の色紙形、周囲の表具裂、黒漆塗の木枠に打たれた金具まで細心の注意を施して仕立てられたものである。その意義については、[雑誌論文]③に記載した論考で指摘しているが、現在の屏風の形状は、元禄5年(1692)の明正院の七十賀に関する『本院七十御賀之覚書』(原本は東山御文庫、引用者は宮内庁書陵部所蔵の写本を参照)に、「御屏風高サ五尺、横一尺四寸七分(組フチ除テ)、縁は紅梅、絹練地ニ蝶鳥以糸縫之、金摺薄モ相交、小へり浅黄ノ綾、屏風裏地クリ、梅鳥形如常、ふち黒塗、金物(金メッキ地ナメコ菊水、)、絵山本素軒筆、御屏風色紙(絹地龍形)、十二枚、色紙地色、(青黄赤白紫上句下句壹枚ノ内各隔色也、)」( )内

割註)と記載されたものとはほぼ一致しており、今回の調査で初めて当初のままを保って大切に保存されてきたことを確認することができた。ただし、縁裂の金摺箔は見えなくなっている。

## ②平安時代の倭絵屏風の余韻

先行研究で指摘されているように、本屏風の和歌の歌題は、「文治六年女御入内屏風和歌」のそれを五百年余りも隔てて復活したものである。ただし、文治六年(1190)の屏風の和歌よりも和歌数は三分の一の十二、屏風も十二帖から六曲一双、つまり二帖に減少しており、よりコンパクトな復活であった。いっぽう、文治六年屏風は「長保の例」、すなわち平安の長保元年(999)の「藤原彰子入内屏風」を典例として制作されたものであり、長く途絶えていた屏風歌の詠作もそれにならって復活したものであった。以上の経緯をうかがうと、現存する「明正院七十賀月次図屏風」は、七百年も遡る平安の倭絵屏風の余韻を簡略化して伝えている可能性があり、しかも絵とともに重点が置かれている表具などの装飾的な側面にも、残存しているかもしれないのである。そうした視点からの検討の必要性が浮上したことも今回の調査研究の成果である。

## ③「文治六年入内屏風和歌」の復活にみる政治的意図

歌題の「文治六年女御入内屏風和歌」の復活は、全般に17世紀前半期の宮廷における「新古今和歌集」などの古典復興の文脈で理解することができるが、和歌詠進に貼りつく政治性を含めた復活であることを見逃すべきではない。すなわち、「文治六年入内屏風」は、同年正月十一日に後鳥羽天皇のもとに九条兼実の娘、藤原任子が入内した際に用意されたものだが、この入内は幕府方と親しい九条兼実が外戚として勢威をもつことを意図したものだった。つまり、制作の背景として鎌倉幕府と朝廷との関係を強く読み取るこ

とができるのである。

いっぽう、明正院は徳川秀忠を外祖父とする皇女であり、よく知られるように、その即位は父後水尾天皇と徳川方との確執に起因する突然の譲位によるものであった。屏風の進呈者である異母弟、霊元院はそのことを踏まえて、歌題として「文治六年入内屏風和歌」を復活させた可能性がある。つまり、古稀を祝う賀屏風を調進するにあたって、鎌倉幕府に徳川幕府を重ね合せ、それによって明正院が朝幕関係を象徴する存在であることを際立たせたのである。古典を単に復活させるのではなく、それを借りて意味の二重性をも意図したところに、本屏風を制作させた皇族・宮廷人の古典に対する教養の深さと強かさがうかがえる。以上の知見は、なるべく早いうちにまとめて公表していきたいと考えている。

## (3) 海外調査の成果

以上に加え、本研究では宗達派の「扇面散図屏風」(旧原家本)、イェール美術館蔵「十二か月花鳥図屏風」なども調査対象に加え、前者については同様に高精細デジタル画像の撮影を行い、その意義を[雑誌論文]の項に記載した①の論考で指摘した。後者については、「明正院七十賀月次図屏風」と同じ山本素軒筆であるにも関わらず、先行する言及は、*Word in Flower*展図録程度で乏しいので、詳しい調査を行うことにした。調査者は研究協力者の三戸信恵氏と渡辺雅子氏である。「定家詠十二か月和歌花鳥図」は江戸時代を通じて爆発的に流行した画題であるが、意外にもその始原の状況は明らかになっていない。本図は17世紀末における展開を示す資料として重要である。以下に今回の調査によるデータを簡略に記す。

### ①全体の図様、技法、表現上の特色

- ・材質技法：紙本着色
- ・寸法：本紙 各 縦104.7cm×横49.7cm
- ・画題は色紙にかかれた題と合致。色紙に記

## ②和歌の書の特徴

・各色紙の右側に筆者の極書が貼られる。筆者名は以下の通り。

- 右隻 第一扇 (一月) : 鷹司兼熙  
第二扇 (二月) : 久我通誠  
第三扇 (三月) : 醍醐冬基  
第四扇 (四月) : 今出川伊季  
第五扇 (五月) : 花山院持重  
第六扇 (六月) : 中院通躬
- 左隻 第一扇 (七月) : 有栖川幸仁親王  
第二扇 (八月) : 九条輔実  
第三扇 (九月) : 清水谷実業  
第四扇 (十月) : 持明院基時  
第五扇 (十一月) : 庭田重條 (条)  
第六扇 (十二月) : 飛鳥井雅豊

## ③料紙装飾の特徴

・12枚全て地色、金銀泥下絵、金砂子蒔きの装飾が施される。

・本紙は絹ではなく紙を使用。・寸法：縦寸の31.0cmは共通

横寸は若干ばらつきがあり、基本は50.0cmだが、第一扇は左右とも49.9cm、右隻第三扇のみ50.1cm

・金銀泥の下絵は一枚に一図。各扇で図様の主題が異なる。右隻と左隻で、各一紙を除き同一主題が繰り返されるが、順番はばらばら。

- 右隻 第一扇 (一月) : 花卉  
第二扇 (二月) : 芦に雁  
第三扇 (三月) : 松林  
第四扇 (四月) : 朝顔  
第五扇 (五月) : 竹  
第六扇 (六月) : 春草
- 左隻 第一扇 (七月) : 花卉  
第二扇 (八月) : 朝顔  
第三扇 (九月) : 春草  
第四扇 (十月) : 蝶鳥  
第五扇 (十一月) : 竹  
第六扇 (十二月) : 松に梅

・使用される材質は異なるが、画中に描かれた春草と料紙装飾の春草とはタンポポの描

き方などに似通った雰囲気認められる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

①玉蟲敏子「宗達の眼と魔術—和歌巻から大画面障屏画への道程—」、『聚美』7号、青月社、2013年、pp.14-37

②玉蟲敏子「狩野養川院惟信・伊川院栄信筆「月次図屏風」(東京都江戸東京博物館蔵)」、『美術フォーラム21』29号、2014年、醍醐書房、pp.4-8

③玉蟲敏子「やまと絵と琳派の交流」、『美術フォーラム21』29号、2014年、醍醐書房、pp.31-35

④玉蟲敏子「やまと絵の広がりから尾形流の成立へ」、『美術フォーラム21』29号、2014年、醍醐書房、pp.42-51

[学会発表] (計 0 件)

[図書] (計 0 件)

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

玉蟲敏子 (Tamamushi Satoko)  
武蔵野美術大学・造形学部・教授  
研究者番号：10339541

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

五十嵐公一 (Igarashi Koichi)  
兵庫県立歴史博物館・学芸員  
野口剛 (Noguchi Takeshi)  
(財) 根津美術館・学芸第二課長  
三戸信恵 (Mito Nobue)  
山種美術館・特別研究員  
渡辺雅子 (Watanabe Masako)  
学習院大学・研究員